北海道医師会役員退任ご挨拶

激動の乱世に生きよ

前副会長
佐野　文男

北海道医師会常任理事として1期2年、副会長として4期8年の長きにわたり、務めさせていただき、その間、大学や市中病院の勤務医としては、経験のできない非常に多くのことを学ばせていただきました。

管掌部は救急部、学術部、病院部、医療関連事業部で、それぞれに内在する小児救急対策、北海道医学会、勤務医問題、医療安全対策、禁煙対策、医事紛争処理、北海道との諸会議、看護対策、医師需給対策、等、諸問題に微力ながら対応させていただきました。

北海道医報の「指標」には、なるべくいろいろな流れを先取りし、英文の略語やカタカナの命題も取り上げ、書かせていただきました。

日本医師会の委員会では、勤務医委員会で副委員長を、医療安全対策委員会では委員長を仰せつかり、特に医療安全対策委員会における会長諮問に対する答申のまとめでは、眠れぬ夜も幾度か経験しつつ、結果として評価の高い答申を得たことなどが思い出されます。

医師会以外の機関から身の丈に不相応な重い役柄の要請を受け、会長はじめ多くの役員の方々、事務局の方々から、過分なるご指導とご支援をいただきながら、なんとか責務を果たすことができました。しかし、そのことが私自身の医師会活動に大きく影響があったことは、今更ながら忸怩たる思いがいたします。北海道医師会の皆様にお詫びとお礼と感謝を申し上げます。

北海道医師会のますますのご発展と会員の皆様のご健勝を祈念して、役員退任の挨拶といたします。

有難うございました。

A philosopher must begin with medicine and the physician must end with philosophy.

— Aristoteles —

常任理事14年を顧みて

前常任理事
豊田　　馨

平成3年4月から道医常任理事として、救急医療、労災・自賠責、介護保険などの仕事をして14年を経過し、この度任期満了をもって退任した。

救急医療では道の保健福祉部の協力のもと、本道の救急医療体制を整備し、量的にはほぼ完成したが今後は質の問題が残っている。

奥尻島沖の地震・津波に始まり阪神・淡路大震災、釧路・十勝沖の度重なる地震、有珠山噴火等忘れられない災害に数多く出会った。

それらの対策として災害拠点病院の整備、札幌医大での高度救命救急センターの指定、最後には民間病院へのドクターヘリ導入など、多くの事業に参画できた。

また、メディカル・コントロールに協議会を通して救急救命救命士の包括下での除細動や気管挿管、昇圧剤投与と救命士の業務拡大が議論され着々と実現化してきている。

毎年全道各支庁を巡回する全道防災綜合訓練や、高橋名誉教授との家庭の救急医療教室、救急医療ブロック研修会等で、全道をほぼ巡りつくした。特にブロック研修会等では札医大浅井教授、北大丸藤教授、旭医大郷教授に大変お世話になった。今後共よろしくご指導願いたい。全道を巡り、地方の医師会の先生方と親しくさせていただき厚くお礼申し上げる。

救急医学会、臨床救急医学会、集団災害医学会等全国の学会にも毎年出席し、救急医学界のトップの方々との交流もできた。

介護保険関係では、発足時のケア・マネジャー試験の講習や、主治医意見書研修会などでも各地へ出張し、地方の皆さんに暖かく歓迎され、楽しく過させていただいた。

労災・自賠責では日医の委員会に所属した。当時日医の自賠責新基準が出来て全国に広めている時であった。北海道では平成6年11月より日医の自賠責診療費算定基準に合意し採用した。全国で22番目であった。当初は損保と医療機関でのトラブルがしばらく続いたが、最近ではお互いに合意事項を守り落ちついている。

日医の労災・自賠責委員長に連続3期6年間指名された。労災に準じての理学療法の逓減問題等にぶつかり、日医の石川副会長、羽生田常任理事と逓減緩和に対応した事が思い出される。現在では、岡山、山梨を除いて全国45都道府県が日医の新基準を採用している。今後は個人情報保護法下の自賠責請求問題が浮上しそうだ。

学生時代にも経験のなかった札幌ー旭川間の汽車通を14年間行った。この間国鉄からＪＲとなり往復3時間で楽にはなったが、老境の身には疲労が蓄積するようになった。

長い間北海道医師会役員としての活動を支援してくれた北海道医師会員、そして北海道医師会職員の皆さんに厚くお礼を申し上げる。

常任理事退任挨拶

前常任理事
西家　皞仙

この度、1999年4月から2005年3月まで、3期6年間の北海道医師会常任理事を退任することになりました。在任中は、学校保健部部長4年、地域福祉（介護保険等）部部長2年、医療保険部副部長6年、介護保険部副部長4年、地域保健部副部長2年および財務部部員2年と「ゆりかごから墓場まで」の保健と保険そして福祉に対する職責を全うすることができました。この6年間は、非常に有意義で、大変勉強になり人生観に細やかな厚みができたかと思っています。飯塚会長をはじめ、佐野・長瀬・赤倉3副会長には大変お世話になり、この場にて感謝を申し上げます。

思えば、新飯塚会長就任の7つのプロジェクト委員会の一つに全国に先駆けた「北海道医師会少子化対策検討委員会答申」を作成し「少子化対策シンポジウム」を実施いたしました。第2に2000年に導入された介護保険制度5年目の見直しに向けて、「社会保障審議会介護保険部会」などの迅速な最新情報伝達に努め、2003年度郡市医師会介護保険担当理事協議会には「介護保険制度見直しの審議経過について　日本医師会　青井禮子常任理事」「2015年の高齢者介護からー痴呆対策を中心にー　厚生労働省老健局計画課　館石宗隆課長補佐」、2004年度郡市医師会介護保険担当理事協議会には「介護保険制度の見直しについて　厚生労働省老健局　山崎史郎総務課長」の特別講演を行いました。

今後の制度改正施行までの1年間は政省令の改正の重要な年になります。また、「高齢化に対応する地域医療再編と包括的システムの構築」に関して、「地域密着型サービス」「地域包括支援センター」「医療と介護の連携強化」などで地域医師会における介護保険に対する積極的な関与と理解が一

層重要となるものと思われます。

以上、常任理事退任の挨拶とさせていただきました。今後の北海道医師会の益々のご発展を祈念して止みません。

役員退任ご挨拶

前常任理事

羽田　克己

謹んで退任のご挨拶をさせていただきます。北海道医師会の４年間を回顧しますと、就任１期目の２年間は医業経営・福利厚生部担当でした。医業経営に関しましては、多くの医療機関の先生方が当時から現在まで右肩下りの経営で苦境に立たされています。私個人のせいばかりではございませんが、力不足で申し訳なく思っております。

２期目の２年間は健康教育事業部担当でした。

４年間を総括しますと、思い出に残る仕事としては北海道医報内視鏡の執筆、北海道健康まつり収録など３度にわたるテレビ出演、禁煙医師歯科医師連盟とタイアップした禁煙運動、少子化対策委員として道の条例づくりへの参画、日本医師会、大講堂での講習会座長などありますが、どれもこれも精魂こめてやりました。

とはいいましても、常任理事の多くの任務を何とか無事果たすことができましたのは、私の能力というよりいろいろな方のお世話があったからと重々承知しております。深くお礼を申し上げます。

常任理事を退任し１カ月余たちました。

静かにのんびりした時間が過ぎていきます。

立場を弁えて、もの申す煩わしさから解放され自由を満喫していてます。

それでは皆様、さようなら

理事退任ご挨拶

前理事

渡辺　信彦

中央ブロックの推薦による道医師会理事１期２年の担当を無事終えることができました。この間役員、会員、事務局職員の皆様には大変お世話になりご指導ご協力いただきましたこと心よりお礼申し上げます。

医政なくして地域医療の発展は望めないと言われますが、理事就任直前の代議員会において小泉内閣の退陣要求の決議文が採択されながら、自民党を支持政党とするという捻れ現象の中での執行部参加となりまして、矛盾というかジレンマというか大きな難しさを感じました。すっきりせぬ雰囲気の間に衆議員選挙があり、一種の苦悩の混じられる中、５区常勝楽勝の自民党議員は漸く深夜になっての当確でした。宣べなるかな。続いての、もしや道医出身初めてなるかという日医会長選挙の困難極まりなき戦いを身に感じ、そして続く参議員選挙では、３年前の武見選挙を背負いながらの西島選挙でしたが、当選したとはいえ道医の力不足としての結果をみせられることになりました。そして、誰が勝を得たのだろうという、盛り上った混合診療解禁阻止運動も加わり、大変に印象深い２年間でありました。

振り返って、常任理事の皆さんの多忙ぶり勉強ぶりにはただただ感心させられました。さらに益々大いなる活発な議論がなされるよう期待するところです。

今後はこの貴重な経験を地域医師会活動にできるだけ生かして行きたいものと存じています。今後ともよろしくお願申し上げます。北海道医師会のますますの発展活躍を祈念し、退任のご挨拶とさせていただきます。

理事を退任いたしました

前理事
高橋　昭三

去る3月末日をもって道医理事を退任いたしました。

一昨年9月からという途中からの就任だったので、1年8カ月という短期間ではありましたが、飯塚会長はじめ、役員諸先生のご指導をあおぎながら、また、後志ブロック選出という責任を確認しながら、無事任期を終えることができましたことに感謝しているところであります。

短い期間ではありましたが、また、多くの記憶に残る経験もさせていただきました。殊に日本医師会々長選挙に関連してあわただしく動いたこと、その時どきに青柳先生が小樽市医師会々員であるということに伴って、まぶしいような席につくということに戸惑ったことが想い出されます。そして悔しい、悲憤やるかたない想い、敵陣の哲学も政策もなき野合に抗すべき術のなかった無念さを忘れることはできません。

今の日本医師会の萎えたような、信念というものを感じない、指導力不足を露呈した姿には私共は耐えられないと切に思っております。

去る3月末の日医代議員会における北海道医師会の意気盛んな光景を思い浮かべて快なりと叫んでいます。

北海道医師会の今後益々の活躍と、未来志向的な、先見的な方向を、広く道医会員に示していただきたいと願っております。

役員退任ご挨拶

前理事
斎藤　修弥

道医の理事として14年もの長い間在籍しましたが、3月末をもって退任いたしました。この間皆様方に大変お世話になりましたこと、厚くお礼申し上げます。これまで勝手気ままに質問したり発言してまいりましたので、いろいろとご迷惑をおかけしたことと深くお詫び申し上げます。

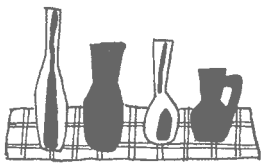
若輩にもかかわらずこのような言動を取れてこれたのも、実は20年前初めて道医の医政研究委員会に出席した際、冒頭当時の飯塚委員長から「何でも思ったことを率直に話すように」とのご指導をいただき、以来、この教えを忠実に守ったためと考え、飯塚会長に改めて心から感謝申し上げます。

さて、この14年間に理事としてどんな仕事をしてきたのかと反省しますと、真に汗顔の至りでございます。先日何か客観的な資料はないかと過去の「北海道医報」を点検していましたら、たまたま小生が寄稿した「第108回日本医師会定例代議委員会印象記」が目にとまりました。今から約2年前の報告ですが、読み返してみると不思議に現状の日本医師会の姿とオーバーラップすると感じたので、要点を紹介しそれに対する小生のコメントを述べたいと思います。

まず、日医代議員会の冒頭挨拶では当時の坪井会長が会務執行の土台とすべき「三つの柱」を説明しました。第1は会長として地域医療の実態を十分に把握し、全会員が情報を共有できる体制を構築する。第2は会内会外ともに積極的な広報活動を展開し、特に会外的には攻めの広報を実行していく。第3は医師会の自浄作用の促進を図ることを強調しています。さて、この2年間に何が変わったのでしょうか。私は率直に申し上げて進展どころか日医は適切な具体策を提示できず、執行

部の無気力とあいまって全体として後退しているという印象を強く感じています。坪井会長の退任を受けて登場した植松会長は、この１年間目前の医療危機を幅広い国民との共闘を通じて打破すると強調しています。その姿勢は評価しますが、日医総研の活用法に象徴される如く具体的なデータや目標を提示せず、いたずらに精神論のみを繰り返している姿に失望しています。

次に代議員会における質疑に言及していたので、その一部を紹介します。「一連の代議員会の質疑を見守るなかで、代議員会における質疑は何かという素朴な疑問が生まれてきた。ディベートはあくまでもディベートに徹すべきで、いやしくも権力闘争に利用する如きの言動は、民主主義のルールを逸脱した行為である。むしろ代議員会では医療危機に対し本格的に論ずべきテーマが放置されている。したがってわれわれ会員一人ひとりが個人として、また地域医師会として地域の人々に積極的に働きかけていく。そのようなエネルギーの流れを起こす行動が、今われわれに求められている。そんな思いが痛感された代議員であった。」小生が言わんとしたのは代議員会質疑の形骸化と内容の乏しさです。このような現状を打破して、ダイナミックで活力溢れる日本医師会に変貌していくことを心から願っています。



理事退任に当たって

前理事
長内　宏

去る３月末日をもって道医理事を退任いたしました。釧路市医師会会長退任に伴うものでありますが、２期４年間、飯塚会長はじめ役員各位には種々ご指導を仰ぎ、またその超人的活動の一端を垣間見る機会にも恵まれたこと、さらに会員諸先生のご支援をいただいたことと併せて深く感謝を申し上げる次第であります。

医師会活動の原点は、医師会存立の理念に謳われる如くでありますが端的に申せば「真の国民医療を確立するため、われわれ医師が医道に則りよりよい医師になるための活動」であり、「われわれ医師の責務の一つである」と理解しております。然ればわれわれは医師としての天職を遂行する以上、主観や思想を超越して積極的にこれに参加せねばなりません。

短い４年間ではありましたが、平成13年には小泉内閣が発足し、種々の改革案を打ち出されました。しかしこと医療改革に関しては、官邸主導の中枢にある財政主導、市場原理一辺倒の思想に毒された委員からなる集団によって、医療の本質から遠く外れた誤まった道へと歩みつつあります。医療の本質論を語る才はありませんが、(最も重要な社会共通資本として)、(国民の安心、安全を保障するものとして)、(世界一の長寿国を築き上げた皆保険制度として) われわれは日本の医療のよきものを護り、より確かなものとして次代に引き継ぐべき重大な責任を科せられています。

今、人類が望む世界平和は「テロ」という得体のしれぬ暴力によって極めて困難な状況におかれています。2001年の９・11テロによる「マンハッタンの惨事」は世界中を恐怖のどん底に陥れ、宗教問題とも関連して世界情勢を一変させました。そんな最中、我が国では自衛隊の海外派遣を巡っ

て国論が沸騰する一方、北朝鮮による拉致問題、韓国との友好感情の盛り上がりも東の間の竹島問題、近々には、中国の大規模な反日極右運動など国の内外は目まぐるしい変転をみせて居ます。

医療の現実もまた正に有為転変、その対応は至難の技となってきました。しかし今後の医療改革に対し、如何なる難事たりともわれわれは医療担当者として「国民のための医療確立」にあらゆる努力を傾注せねばならないと信じます。

この4年間、武見敬三、西島英利両参議院議員の当選という祝賀がありましたが、最大の痛恨事は「日医会長選」でありました。北海道医師会は飯塚会長以下各役員の皆様が札幌市医師会と密接な連携の下、短期決戦である選挙戦に総力を挙げて取り組まれました。青柳　俊候補ご自身の活動は勿論、東奔西走の数カ月、時に臨場の機会もありましたが北海道医師会の未来への大きなエネルギーを強く感じたものでした。しかし、予想外の戦略により北海道医師会として千載一遇のチャンスを逸したことは誠に残念の一語に尽きます。各役員の心中察するに余りあるものと存じますが、敢えて「敗軍の将　兵を語らず」。しかしこの北の大地に満ち溢れた清新な活力と知性は必ずや捲土重来の日ありと信ずるものであります。

最後になりましたが飯塚会長先生をはじめ役員諸先生ならびに会員各位の一層のご活躍、ご健勝を祈念申し上げますと共に北海道医師会の益々のご発展を切望し退任のご挨拶といたします。ありがとうございました。

議長退任ご挨拶

前議長
秋川　恵二

退任にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

1期2年間の短い期間でしたが、円満に退任させていただきました。この間少しく自分なりに考えたこともありましたが、十分にいかしきれませんでした、しかし、大過なく務めることができたと思っております。塀の内外という言葉が流行した時期もありましたが、道医の仕事に直接関与しだした時と、それ以前の時と考えると、まさに言葉通り、全く別社会の実感を肌に感じた次第です。膨大な諸事業と各郡市医師会からの要請、要望に応えるべく、その調整に腐心される姿を目のあたりにして私なりに努力した積りです。この間多くの先生方と出会い大変勉強させていただきました。また会長はじめ、各役員、会員の先生方には、種々ご指導を賜り、かつご面倒をおかけしたこと等、誠に感謝の言葉もありません。さらに退任に際しましても多数の方より暖いお言葉をいただいたことも忘れられません。最後になりますが、業務を支え、準備を遺漏なく整えて下さった河村局長はじめ、道医の優秀な職員の皆さま方にも深くお礼申し上げます。医療界は今後も、ますます多難な時期に向っております。皆さまのご活躍と、ご健勝を祈念し、退任のご挨拶といたします。